

役職や地位を捨てて東方に道を拓き、戦国武将の嚆矢、戦国大名後北条氏初代となった。

$$\cdot \cdot \cdot \cdot \cdot \cdot 1456 =$$

備中国荏原郷で、室町幕府政所執事伊勢盛定の次男に生まれる。母は伊勢貞国の娘。

伊勢系図などで、死去した享年が88歳とあったため、1432年誕生とされてきたが、姉や子の年齢と整合性が無く、子年生まれは間違いないようなので、1456年説が浮上し、妥当とみなされるようになった。

鎌倉公方と関東管領山上内杉氏の長年の対立の結果、この年、將軍足利義政によって鎌倉に派遣されるも、入れなかった足利政知が伊豆に入り、やがて堀越公方と呼ばれるようになる。

曾祖父の代には、源平合戦で活躍した那須与一の恩賞地備中国荏原郷の三分の一ほどを知行するようになっていたが、経済的基盤としては大したものではなかった。父の甥とその子も同じくらい知行している。

応仁の乱が勃発、

備中国荏原で少年時代を過ごす間、正義と平等を大事にする人格が形成されたとみられる。

この年、今川義忠の子竜王丸(氏親)が、姉(父の娘)を母に誕生。備中荏原郷の、父が創建したという曹洞宗

法泉寺に、平盛時の名で、三ヵ条の禁制を発給したのが、文書の初見。

父盛定が具足を売却していることから、経済的には困難であったようだ。

義忠戦死後の今川家内紛では、竜丸を支持、小鹿範満支援のため扇谷上杉定正から派遣されてきた太田道灌と出会い、竜丸(氏親)に家督を譲らせることで一応の決着を見、歴史に登場。

京都に戻って幕府に働きかけ、将軍足利義政が、竜王丸(氏親)の家督相続確認の内書を発給。

この間、建仁寺の僧から熱心に古典籍も学び、大徳寺の春浦宗熙に師事して禅に精進するなど、教養豊かで道徳的、欲望は控えめな人物になっていたと考えられる。

幕府と古河公方足利成氏との長年の敵対関係が和睦となり、足利政知は伊豆のみが支配地になる。父盛定がそうであったように、**将軍足利義尚の申次衆に加えられるが**、

[illegible]

扇谷上杉定正によって、太田道灌が謀殺されるや、嫡子氏綱が誕生。山内上杉氏と扇谷上杉氏の争い(長享の乱)が勃発したのにも対応して、申次衆を辞し、

小鹿範満を駿府の館に攻めて自害させ、竜王丸を駿府に移し名実ともに今川家の家督とした。この功績により、駿河の富士下方12郷を与えられ、豊国寺城主となる。

熊野那智山領駿河國長田庄を神社に返還する決定を下すなど、今川家の守護代の役目を果たす。前年の足利義尚の病死を受け、日野富子の後押しで、足利義材が将軍になる。

伊豆菰山御所で、足利政知が病死し、政知の子足利茶々丸が異母弟の潤童子とその母丹満院を殺害する事件が起こると、京都政所伊勢貞遠の仲介で、駿河河原一色についての幕府奏書を得、石脇城に出陣。

細川政元が將軍足利義材を廢し、足利政知の子清晃(義澄)を擁立すると(明応の素)、畠谷上杉定正支援の

ため、相模・武蔵に出陣、伊豆に侵襲して、政知の子茶々丸を追い、戦国時代の幕開けとなるが、そのもとには、平家出身として、その原郷伊豆へ進出し、独自の世界を創ろうとしたとも考えられる。

今川氏親の要請で、遠江・東部に出兵、続いて、扇谷上杉定正支援のため武蔵に出兵し、初めて定正と会談する。定正が落馬して急死

判物にはじめて宗瑞と署名。地震が起き、相模湾岸に津波が押し寄せたのを機に、甲斐に進出して、武田信綱と和し、相模の小田原城を攻め、大森藤頼を追ってこれを奪い、関東進出の第一歩をする。

相模で山内上杉頼定から大反撃されて、弟の弥次郎を失っている。

*大規模地震とそれに伴う津波による災害の機に、深根城の関戸吉信を攻めて籠城者を皆殺し、ようやく足利義満を自らに追い込み、山内上杉氏の支配を排除、荒山に城を築いて、伊豆国主の地位を獲得した。

河川氏の領国保全をねらうために三河岡崎城、岩津城を攻撃。
 堀の構造は、この頃、十徳寺79年にあった東遷宮敷から「王山」の道号を与えられるほどであった。

今川氏親とともに、扇谷上杉朝房を助けて、武藏上河原の戦いで山上上杉頼定を破る。京都の医者陳定治を小田原に招いて、丞頂丞(外郎)の制度監事を任ぜさせるなど、城下の整備を図っている。

日頃愛読してきた『太平記』について、足利学校の学徒に校訂させるなど正確を期した写本を完成させる。翌年にかけて清江も平定する一歩、伊勢守瑞隆十カ冬を制定し、検地に始めるなど、治者の眼目は示し

氏親のため、再び三河に出陣。**◆新基準の貫高の採用など、領国支配体制の基礎固めをする。**民を重んじ、

前年から、2回にわたって、氏親の援軍として三河に出陣。

羽台・上杉家臣・工政監を誘つて陣起こせるも、羽台・上杉朝成に攻略されるなど、二相模侵攻は一旦挫折、相模岡崎城の戦で三浦義明を敗走させ、氏綱と連署して伊東氏に感状を発給して、鎌倉を支配下に置き、その頃、世々の秀吉が北條氏に上杉氏の五万連を招き、美濃の巨魁を退けて新井城に泊り、い

この頃、重臣の香田守任持、入道守の久米宗信を招聘。義興の反事を退け、初升城に追い込み、ついに義興・義意父子を討って三浦氏を滅亡させ、相模を征服。三浦半島、八丈島も支配下に置き、かつての桓武平氏の特長を承けて、よく上総守、上野守の二頭立てで、上総に出る。

の桓武平氏の伸長を避るること、上総具里谷の武田氏の要請に來つて、上総に出兵し、百姓宛ての定め書から始まる、代々の北条家当主の家印となる虎の印判の朱印状に見られるように、百姓に宛てた書状として、近世の時代の変遷にも影響を及ぼした。

と直接向き合う権力として、新たな時代の幕開けを象徴する人物として、
 発病し、三男長綱(幻庵)に各地の所領を譲与し、伊豆の葦山城で没した。
 彼各々各々の名は9代氏綱が、1599年に改称して、それぞれ「北島貞雪の名は後世の通称であり、近年では、伊

北条を名乗るのは2代氏綱が、1523年に改称してからで、北条早雲の名は後世の通称であり、近年では、伊勢宗瑞とする記述方が適切であるとされる。遺言により、氏綱は箱根湯本に菩提寺早雲寺を整備し、以天宗早雲寺住持に迎へ、以後、北条氏の菩提寺、早雲寺は北條氏の有力な修験の場となり、三行寺

清を住持に迎え、以後、北条氏の支援で、早雲寺は大徳寺への有力な修行の場になって行く。

「この人どんな人」,「没年日本史人物事典」,「人物日本歴史館」,「日本の群像」,平凡社百科事典,山田

上裕子「北条早雲：新しい時代の扉を押し開けた人」で全面修正、